

研究活動報告

本研究プロジェクトは、平成18年9月に平成18年度学部長裁量経費を取得し、「世代間コミュニケーションと教育」研究会を組織して同年10月から本格的に活動を開始した。プロジェクトの活動内容は、以下のとおりである。

(1) 活動記録

2006年

10月11日 研究打合せ会

11月24日 第1回研究会

榎原茂「歴史学からのアプローチ—オーラル・ヒストリーの研究動向に関わらせて—」

12月25日 第1回公開講演会

築道と明「小学校の英語活動を展望する—中学校の英語教育との関連を中心に—」

2007年

2月20日 第2回公開講演会

鯨岡峻「保育・教育の中心課題と、育てる営みの世代間伝達—子どもを一個の主体として育てるために—」

3月8日 第3回公開講演会

高塚人志「そばにいる人から喜ばれる喜び—「役立ち感」で自分が好きになっていく—」

3月6日 第2回研究会

福田景道「歴史物語の伝達体系—世代間コミュニケーションの方法と可能性—」

3月15日 第3回研究会

正岡さち「コミュニケーションの場としての住まい—『頭がいい子が育つ家』を題材として—」

10月17日 研究打合せ会

12月5日 第4回公開講演会

田村栄子「ドイツ近現代史のなかの青年世代」

2008年

1月30日 第5回公開講演会

山口修平「前頭葉機能研究の進歩」

2月6日 第4回研究会

舟木賢治「生命の大切さを考える生物の授業を通して思うこと」

2月18日 第5回研究会

岩宮恵子「世代間境界の崩れが子どもに及ぼすもの」

2月28日 第6回研究会

新井知生「現代美術とコミュニケーション」

3月13日 第7回研究会

山崎亮「宗教民俗をめぐる異文化間コミュニケーションと世代間コミュニケーション」

9月11日 第8回研究会

諸岡了介「終末期における世代間コミュニケーション—〈お迎え〉体験を中心に—」



高塚人志氏講演会
2007年3月6日

田村栄子氏講演会
2007年12月5日



山口修平氏講演会
2008年1月30日

(2) 公開講演、及び発表要旨（発表順）

<公開講演要旨>

築道和明「小学校の英語活動を展望する —中学校の英語教育との関連を中心に—」

英語によるコミュニケーション能力を養成するという目的を国家の言語教育政策として具体化した「英語が使える日本人の育成のための行動計画」が実施に移されて4年が経過します。講演の前半では、英語を用いて自由に意思疎通を図りたいという我々の願いは今に始まったものではないことを確認した上で、英語が使える日本人の育成を阻むと思われるいくつかの要因を検討したいと思います。後半では、現在その将来像が模索されている初等学校における英語教育に焦点化して、中学校との英語教育との連携という視点から、「体験と知識」「遊び場の言語と教室の言語」「音韻認識能力と読み書き能力」、の3つの窓から初等学校の英語教育を展望したいと思います。

鯨岡峻「保育・教育の中心課題と育てる営みの世代間伝達 —子どもを一個の主体として育てるために—」

いま、保育や教育では多くのことを子ども「させる」「与える」「教える」動きが目立ち、発達を早め、発達の階段を高く登ることが幸せの条件であるかのような考えが保護者にも強いようですが、それは本当に子どもの幸せに繋がる保育や教育の営みなのかを考えて見たいと思います。そのような考えは、前の世代によって育てられて大人になった人が、次の世代を子どもを育てるという「育てる」営みの世代間伝達（循環）という、人類太古からの「育てる」営みの基本から見れば、きわめていびつな考え方であるように思われるからです。このことをまず主張し、保育や教育の基本的な目標は、一人の子どもが「わたしはわたし」と自分の立場を表現できるようになると同時に、「わたしはみんなの中の一人」という姿勢を身につけて周囲の人と共に生きようになること、つまり一個の主体として「育てられ—育つ」ことであるという私の基本的立場を提示してみます。そしてその観点から、現行の保育・教育のありようを批判的に見てみたいと思っています。

高塚人志「そばにいる人から喜ばれる喜び—役立ち感で自分が好きになっていく—」

人間関係が希薄になっている時代の中で、失われているものの一つに人が成長しにくくなっていることがあげられる。不安やイライラ、孤立感など多くの人が寂しさを抱え自分や他人を傷つけているのではないだろうか。次々と起こる異常な事件。子どもたちに目を向ければ、自分を傷つけ、心を閉ざし、非行、暴力、不登校、いじめ、学級崩壊、人間関係がとれないなど、今や国をあげての社会問題である。時代を作っている大人はどうだろうか。子どもの問題は私たち親や大人とつながっている。人間関係が人を育てるのだが、その人間関係が軽くてはどうにもならない。私たちは、好むと好まざるとに関わらず、集団の中で他人と関わり合って育ち、他人と協働して、様々な役割を果たして生活している。つまり、他人との関わりが私たちの人生を左右する大きな鍵を握っているのだが、そのことに気づいている人は少ない。その中で、人にとって当たり前のはずの人間関係・コミュニケーションを学び、作る場を意識的に学校現場や地域、職場などに提供することが必須になっている。よって、自分の人間関係を見直して見ることが何よりも大切なことである。今回の講演は、赤碕高校から現在の鳥取大学医学部での11年間の実践を伝えるとともに、可能な限り「気づきの体験学習」で自分と向き合い、自分を見つめ、今の自分自身の人間関係を見直し、どのような人間関係をつくっていくのかを考える一助としたい。

田村栄子「ドイツ近現代史のなかの青年世代 — 「ナチスのドイツ」 から「環境のドイツ」 へ —

近年「団塊の世代」や「ロストジェネレーション」といった言葉がよく目につく。一定の共通の体験をした「世代」を一括りにして、社会や歴史を論じることはよくある。世界史的に見て、このような「世代」論が歴史の分析の一つのツールとしてもっとも有効なのはドイツである。「ドイツ帝国」→「ワイマル共和国」→「ナチス第三帝国」→東西の分裂国家→「統一ドイツ」の誕生というように、目まぐるしく転換する政治的社会的状況が、「若い世代」に活躍の場を提供した。「新しい時代、若い国家は、若者の手で」と「青年」が大人世代に「異議申し立て」をし、「運動」を展開して、歴史の推進力となったのである。ワイマル時代には、「青年」世代はナチス政権樹立に大いなる貢献をしたが、第二次大戦後、ナチスの過去にまともに向き合わず、経済発展に邁進する大人世代を批判した「青年」世代は、1968年の世界的な「青年反乱」と呼応して、「戦争をしない国」「環境にやさしい社会の創出」を国家レベルで推し進める力となった。

「青年」世代のこうした相反する歴史形成力は、どのようにして生み出されたのであろうか。彼女／彼らはそれぞれの時代に、何をどのように批判し、何を生み出そうとしたのであろうか。彼女／彼らを取り巻く教育的・思想的、経済的・政治的な状況を検討することから考えたい。

<研究発表要旨>

榎原 茂「歴史学からのアプローチ——オーラル・ヒストリーの研究動向に関わらせて——」

初回の研究会ということもあり、まずは共通テーマである「世代間コミュニケーションと教育」に関連して、参照すべき先行研究について調査した結果を報告した。専門研究のレベルではなおもほとんど未開拓であること、そして、「世代」概念を「青年—社会」論と「親子—家族」論とに区分する鈴木剛の議論をふまえながら、「世代間コミュニケーション」という術語の曖昧さを認識しておくべきことを指摘した。次いで、歴史学の分野から共同研究にかかわるとすれば、どのようなアプローチが適用できるかを考察し、ポール・トンプソンら、オーラル・ヒストリー（口承の歴史）に関する近年の研究動向を紹介しながら、この分野が「親子—家族」を中心とする地域社会の世代間コミュニケーションに関連していること、学校教育への応用についても可能性を秘めていることを明らかにした。

福田景道「歴史物語の伝達体系——世代間コミュニケーションの方法と可能性——」

古今東西を通じて広く享受されてきた枠物語（Rahmenerzahlung、物語の登場人物が作中で別の物語を語る形式）は、日本の古代・中世においては、歴史物語にその大部分が占められている。この場合、物語の外枠において長期間の史実が老人によって青年や少年に語り伝えられるので、世代間コミュニケーションや世代間教育の場が成立する。

『大鏡』や『梅松論』には、世代間交流の難しさが表現されている部分がある。また、『大鏡』には語り手の老人に対する尊崇が歴史語りの信頼度を増す場面もあり、世代の違いが有効に機能している例もある。『増鏡』には、語り手と聞き手の世代の違いに基づく役割分担が認められる。『今鏡』や『無名草子』では、語り手によって明確な時代区分がなされているが、ここでも世代間格差が前提になっている。

このように枠物語型の歴史物語の外枠部分においては、多様な世代間コミュニケーション、世代間教育の方法と可能性が例示されていると考えられる。

正岡さち「コミュニケーションの場としての住まい～『頭がいい子が育つ家』を題材として～」

近代の日本の住まいは、生活の洋風化の中で大きく変化した。戦前までの畳の空間が中心で、部屋と部屋とは襖で仕切られた開放的な平面から、洋室中心で、部屋と部屋とは壁で仕切られた閉鎖的な平面となった。生活自体も、プライバシー重視で、家族の団らんの時間もどんどん減ってきていると言われている。そのような中、近年、家族の団らんや団らんに対する捉え方がどのように変わってきたのか、また、家族のコミュニケーションという視点から見た住宅平面がどのように変化してきているのかを検討した。その結果、また、開放的な平面へと回帰してきているが、それは戦前のものとは異なり、現代的要素を取り入れた別物であり、2007年に首都圏で発売された『頭のいい子が育つマンション』は「家族がコミュニケーションがとれる」平面であることを多方面より検討した。

岩宮恵子「世代間境界の崩れが子どもに及ぼすもの」

世代間のコミュニケーションがスムーズにとれるためには、その大前提として、世代によって知るべき情報が分かれていることが必要である。すべての問題が子どもに筒抜けに話される状態になっていると、それはコミュニケーションがとれているのではなく、大人の問題が子どもにそのままだれ込んでいるだけであると言えるだろう。

臨床の現場では、親が夫婦の問題や家庭の経済問題など、何でも子どもに話したり相談したりするために、子どもが苦しんでいる事例に出会うことが多い。一見、何でも話し合える親子のように見えながら、実のところ子どもに大きな負担がかかっていることに親が無自覚なことがあるのである。それは、親世代の人たちに、子どもが知ってもいいこととまだ知らないほうがいいことの区別がきちんと自覚されていないがゆえに起こることであると思われる。子どもは、子どもとしてしっかりと守られる時期を過ごすことが大人になるうえでは何よりも大切である。この守りの枠組みが、世代間境界の崩れという形で壊れてきているように思われる。

世代間の境界がはっきりとしていることは、子どもが子どもとして生きることを許されるということである。子どもとして充分、生きることができたという体験が、将来、大人としての責任を負う力を育むのである。大人と子どもの世代間のコミュニケーションが子どもを育むものとして機能するためには、まずこの世代間の境界を守ることに、大人がはっきりと自覚することが重要である。

舟木賢治「生命の大切さを考える生物の授業実践を通して思うこと」

今日の社会において、生命軽視の風潮は益々強くなってきている。生命尊重の心を育むためには、命を実感する機会を増やすことが大切である。生物の授業で最も生命を実感できるのは「動物の解剖」である。しかし、それを実施するためには専門知識だけではなく、準備の段階からの細やかな配慮を必要とするため、近年、実施する学校が急速に減少してきた。

このような状況を踏まえ、我々は高校と連携し、動物の解剖や発生を積極的に取り入れた特別授業を継続的に実施してきた。その結果、授業を通して生徒たちが葛藤し、自己をみつめることにより他者を思いやり、感謝する心が育まれることを実感した。この経験を踏まえ、カール・ユングのいう深層次元の「自己」との“内なる対話”の重要性について言及する。

新井知生「現代美術とコミュニケーション」

美術作品の成立要素を「理念」と「スタイル」とすると、近代においては美術の本質として「自律的」で「造形的」であることが「理念」として求められ、その最先端の表現として幾何学的抽象という「スタイル」に行き着いた。しかし、社会的に近代的合理主義や進歩・発展の思想が破綻したのと同様、美術においてもミニマル・アートをもって近代美術は行き詰まりをみせた。

現代では代わってコンセプチュアル・アートと呼ばれる、「概念」による意識上の世界形成を理念とする美術が成立した。それは絵画などの造形的な形態をとらず、記号、文字、写真、行為などによって提示されるものである。

コンセプチュアル・アートはまた現代において出現したインスタレーションやアース・ワークなどの新しい作品形式の基本理念にもなっている。インスタレーションとは、その場に合わせて空間を組織し異化する「装置」のようなもの。完結した容態を持たず、鑑賞者がその場で体感的に空間を味わうことで、鑑賞者自身の意識の中に新しい世界が芽生えるという伝達装置である。

インスタレーションのような現代美術は、作品を媒体として作者と鑑賞者が「意識の交感」としてのコミュニケーションをとることにより作品が成立する。このような現代美術のコミュニケーション機能は、自我の解放と他者との疎通の可能性を開いた。

山崎亮「宗教民俗をめぐる異文化間コミュニケーションと世代間コミュニケーション」

昨年5月、フランスのストラスブール大学文学部日本学科赴任中に私が行なった一般市民向け講演「日本の神々——出雲地方の神話と祭礼 (Les divinités du Japon : les mythes et les cérémonies de la région d'Izumo)」を題材に、宗教民俗をめぐる、日仏の異文化間コミュニケーションの問題と、伝統という形での世代間コミュニケーションの問題について、若干の話題提供を試みたい。

諸岡了介「終末期における世代間コミュニケーション——〈お迎え〉体験を中心に」

この研究会では、2007年に実施した、在宅緩和ケアを利用して亡くなった患者の家族（主介護者）に対する調査票調査の結果から、〈お迎え〉体験に関する結果を報告するとともに、それが持つコミュニケーション上の意義について考察した。

〈お迎え〉体験とは、終末期患者が死に臨む際に、すでに亡くなっている家族の姿や、ふつうは見るここのない事物を見るといった体験のことで、今回の調査では45.6%の回答者からこうした体験があったとの報告があった。

病院死が約80%に及ぶ現在の状況にあって、こうした体験は見過ごされるか、「せん妄」との診断を受けるケースが多い。しかし〈お迎え〉体験には、終末期患者と周囲の人間とのあいだのコミュニケーションにおいて重要な意味をもっており、これを世代間コミュニケーションの一形態として捉えなおす見方が求められる。